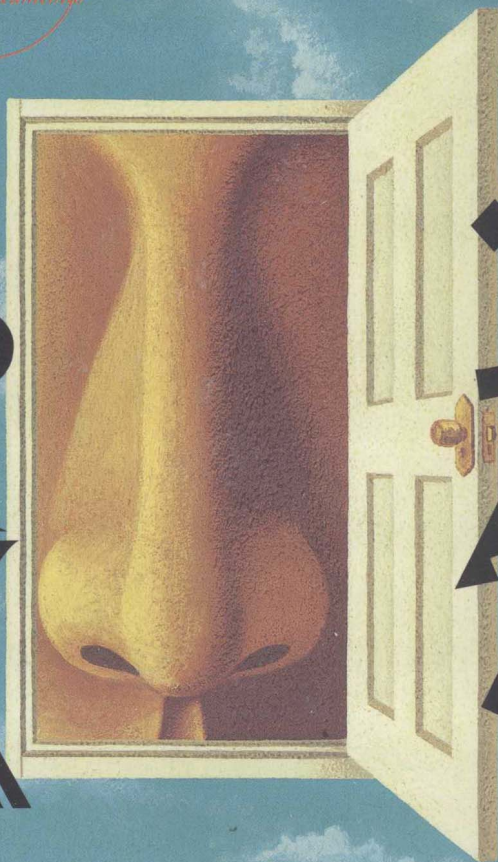


井上夢人

Olfactogram

Issue Yomichigo

グ
ア
ム



テ
ル
ツ
ア
クト

井上夢人

Olfactogram
Inoue Yumchiro

オル
グ
ラム

毎日新聞社

初出

『サンデー毎日』

1997年10月26日号～1999年5月9・16日号

オルファクトグラム

2000年1月30日 第1刷

2001年1月15日 第2刷

著者 井上夢人

編集人 山本 敦

発行人 山本 進

発行所 毎日新聞社

〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋

〒530-8251 大阪市北区梅田

〒802-8651 北九州市小倉北区紺屋町

〒450-8651 名古屋市中村区名駅

出版営業部 03(3212)3257

図書編集部 03(3212)3239

本文印刷 精興社

表紙・カバー印刷 三興印刷

製本 大日製本

落丁・乱丁本はお取り替え致します

© Yumehito Inoue Printed in Japan 2000

ISBN 4-620-10608-9

¥1,900-

オルファクトグラム

重要なのは、多くの嗅細胞きゆうさいぼうの数があんなたちの何倍もあるってことじゃないし、繰り返しテストされた匂けんちいの検知閾けんちいきだか認知閾にんちいきだかがほとんど測定不能なほど常識から外れてるってことでもない。

もちろん、学者の先生やお医者さんなんかがよってたかって多くの鼻をいじくり回した結果がそういうことなんだから、そこに並べられた数字は事実なのだろう。いいよ。事実さ。でも、だからなんだっていうんだ？ そういう数字を抱えたばくは異常だって言いたいわけ？ 人間じゃなくてモンスターだっていうの？ だから実験動物用の檻の中にでも閉じ込めておけばいいってことか？

申し訳ないけれど、そういうのはもうたくさんなんだ。数字とかデータなんてものに、意味はないんだよ。嗅細胞の数が二億個だというなら、それだけ

の話だ。多くの鼻の奥には匂いを感じるための細胞が二億個ある。それは、ほぼシェットランド・シープドッグが持っている嗅細胞の数に匹敵するんだそう。そういうことに興味があるんだつたら、去年金沢で開かれた「日本味覚嗅覚学会シンポジウム」の論文集つてのを読んでみればいい。いろんな学者がいろんなやり方でばくをいじくり回した結果が、やたら難しく書いてあるから。

だけど、そういうものを読んで、いったい何がわかるっていうんだろう。結局そこから得られるものは、多くの鼻がイヌ並みだってことだけじゃないか。ウィルスがどうの、染色体の異常がどうの、いろいろ言うけれど、ばくがこういう鼻を持つことになった理由なんて、お偉い先生たちにだってまるっきりわからなかったんだから。重要なのはね、そんなことじゃないんだ。

一番重要なのは、そんな鼻を持ってしまったために、多くの生きている場所があんなたちのそれとはまったく別のものになっちゃったってことなんだ。イヌがどんな世界に生きているか、想像してみたことがあるかい？ 夜、寝静まった部屋の中で、

突然イヌが頸を上げて窓に鼻先を向けたとき、奴がどんなものを見ているのか、あんたたちにそれがわかるかい？

鋭敏な鼻を持つっていうのは、ただ単に香水の成分が嗅ぎ分けられるとか、一ヶ月も前に部屋を訪ねてきた人をその匂いでみつけどすことができるとか、そんなものじゃないんだ。世界が違うんだよ。イヌはね、あんたたちとはまるっきり違う世界を見ているんだ。

逆に言えば、あんたたちが疑うこともなく眺めている世界は、目玉と脳味噌が作りだしただけの頼りないものだっていうことだ。ウソだと思ふなら、眼を閉じてごらんよ。それだけで、あんたたちの信じている世界は消滅してしまうんだから。

もちろん、ぼくだって生まれたときからこういう世界で生きてきたわけじゃない。ぼくの鼻も、つい一昨年まではあんたたちと同じ機能しか持っていなかった。

今になって考えてみると、それが最初に現われたのはぼく自身じゃなくて、トオルにだったんだと思

う。片桐徹かたぎり ととるっていうのは、ぼくの双子の兄。もうずいぶん前に死んじゃったけどね。半年の間病院のベッドに寝かされた末、そのベッドから這い出すこともできずにそのまま死んじゃったんだ。病名は忘れた。必要なら、病院に問い合わせてみればいいんじゃない？ 十何年前のことだけど、もしかすれば記録が残っているかもしれないから。

もともと、トオルは身体が弱かったんだ。一卵性双生児なのに、病気になるのはいつだってあいつのほうがだった。口に出して言うことはなかったけれど、不公平だと思っていたんじゃないかな。あいつが四十度も熱を出してうなっているのに、ぼくのほうは近所の悪ガキたちと販売機あさりなんかやって遊び回っていたんだから。公衆電話とか自動販売機の硬貨返却口に取り忘れられた十円玉をいただいてくるっていうヤツさ。そんなに確率がいいわけじゃないけど、たまに百円玉なんかみついたりすると大騒ぎだった。

七歳の時、トオルは最後の入院をした。

二週間ぐらい高熱が続いてね。意識もほとんどなくなっちゃって。だからオヤジもオフクロも姉貴も、

そして医者たちも、みんなトオルは死ぬんだって思ってた。死ぬわけないって考えてるのはほくだけだった。

「じゃあ、大丈夫だな」とオヤジはほくを見ながら言った。「ミノルが死なないって言うんだから、助かるよな。双子なんだから、トオルのことはミノルが一番よくわかるよな」

退院はできなかったけど、結局、トオルはそのあと半年生き続けた。あいつが妙なことになっちゃったのは、その死ぬまでの半年の間だったんだ。

あるとき、トオルは突然「真樹子^{まきこ}叔母さんが来たよ」と言った。

「え？」と、オフクロはベッドのトオルに顔を近づけるようにして訊き返した。「いつ？」

「いま来た。シュークリームを買ってきてくれたんだ」

「……………」

その時ベッドの側にいたのは、オフクロと姉貴とほくの三人だった。ほくたちはみんなで顔を見合わせた。

八人部屋というのかな、ベッドがあっち側とこっ

ち側に四つずつ並べられた病室。トオルのベッドは、一番奥の窓際に置かれていた。トオルがそんなことを言い出したのは、外の風を入れるために姉貴が窓をほんの少し開けた直後だった。

真樹子叔母さんというのは、オフクロの妹なんだ。ほくたち姉弟は叔母さんが大好きだった。というよりも、叔母さんの持つてきてくれるおみやげが大好きだったと言うべきなのかもしれない。

ほくたちは、みんなトオルが寝ぼけているんだと思った。叔母さんがシュークリームのおみやげを持つて見舞いに来た夢でも見ていたんだろう。姉貴もほくもオフクロも、ベッドの周りでクスクス笑っていた。でも、それから三分もしないうちに、ほくたちは笑っていられなくなってしまうんだ。

真樹子叔母さんが、洋菓子の箱を持つて病室に入ってきたからだ。箱の中身は、シュークリームだった――。

それからこんなこともあった。

「サラダ、いらぬ。変なものが入ってる」

そう言つて、トオルはその日の昼食の生野菜を食べるのを拒否した。

「ちゃんと食べなきゃダメ。これは、あなたに必要なものなんだから」

オフクロはそう言ってトオルの口にレタスの葉っぱを運ぼうとした。でも、トオルは固く口を結んで絶対に食べようとしなかった。

「必要じゃない。お腹いたくなるの、いやだ」

その病院で集団食中毒が発生したのは、その日の昼食のサラダが原因だった。新聞にも載ったから、調べればすぐにわかるよ。そのとき、同じ病室で下痢から免れることができたのは、トオルだけだったんだ。

そんなことが、立て続けに起こった。トオルは、自分の身の回りに起こることを次々に言い当てはじめた。

廊下側のベッドで寝ているおじいさんのカテーテルが外れてオシッコが染み出していることを看護婦さんに教えたり、回診にやってきた医者に病院の裏の建物のどこかで火事が発生していると知らせたり、向かいのベッドのおじいさんが夜こっそりトイレでタバコを吸っていることを看護婦さんに告げ口したりもした。

ベッドに寝たっきりのトオルの言うことを、誰もが気味悪がった。同室の入院患者たちが病室を変えてほしいと言いはじめ、トオルはもちろんのこと、見舞いにも出入りしているオフクロやぼくたちに声をかける人もいなくなった。

「古田^{ふるた}さんは、もう死ぬんだよ」

と、ある日トオルは、隣のベッドで寝ている老人のことをそう言った。たまたま、そのトオルの言葉が古田老人の奥さんの耳に入り、奥さんはものすごい剣幕でトオルとオフクロを怒鳴りつけた。でも、その古田老人は、トオルがそう言った夜中に集中治療室へ運ばれたまま、二度と病室へは戻ってこなかった。

「超能力……なのかしら」

とオフクロはオヤジに言った。

「そんなものがあるわけないだろう」

「だって、じゃあなんなの？ 裏のビルの、それも二階の隅の給湯室で起こった火事が、ベッドに寝たままのトオルにどうしてわかるの？ その二階で仕事をしていた人も気づいていなかった火事なのよ」

「給湯室が火事だとトオルが言ったわけじゃないだ

ろう。あいつは外で遊ぶこともできないから、そういうことがせめてもの遊びになつてゐるんだよ。たまに思ひついた空想が、偶然実際に起こつたつていうだけさ」

「一度だけのことじゃないのよ。入院患者さんが亡くなるなんてことも、あの子の空想なの？ 食中毒も空想？ あの子はね、病院で寝てるだけなのに、ウチのことがみんなわかつちゃうのよ」

「ウチのこと？」
「昨日の食事の献立とか、あたしたちがケンカしたことか」

「ケンカ……」

「病室に行つたら、いきなり、トオルが言つたんだもの。お父さんとケンカしたの？ って。ぼくのせいなの？ って」

「……………」

「どうして、そんなことがあの子にわかるの？ 誰も、昨日の夕食の話なんてしてないし、あなたとの口ゲンカのことなんて、誰があの子に話すのよ。そんなことわかるわけじゃないの」

「いや、それは、お前の表情を見て感じたとか、

そういうことじゃないのか？」

オヤジとオフクロの間でも、結論は出なかった。医者や看護婦も、トオルのことを不思議に思つたり気味悪がつたりしていたが、結局、あいつに何が起つたのかを説明できた人間は誰もいなかった。

ぼくには、今でもはっきりと記憶に残つてゐるトオルの言葉がある。そのとき、トオルのベッドの側にいたのはぼくだけだった。

「ミノル、きれいだね」

「……………」

ぼくは、不思議な気持ちでトオルを見つめた。トオルは「きれいだね」と言いながら、眼を閉じていたのだ。

「なにが？」

訊き返すと、トオルは目をつむつたままでぼくのほうに顔を向けてきた。

「風。見えるだろ、ミノルも」

「かぜ……？」

ぼくは病室の中を見渡した。

横の窓は閉じていた。病室の中に、風など吹いて

いなかった。時折、向こうのベッドの上で患者さんがブツブツと何か言う声が聞こえる。廊下のどこかで誰かがさかんに咳き込んでいた。

「風なんて、吹いてないじゃないか」

「見えないの？」

トオルはびっくりしたような顔で眼を開いた。そしてぼくを見つめ「そうか……」と悲しそうにつぶやくと、また眼を閉じ、鼻先を天井のほうへ掲げるようにして胸一杯に息を吸い込んだ。

ぼくにはトオルのことがよくわからなくなった。

ぼくたちは双子で、あまり話なんかしなくてもお互いの気持ちを感じ合えることができたはずだった。

ミノルが病気で寝ていないときなら、ぼくたちは同時にお腹が空いたし、同時にトイレに行きたくなることもよくあった。ぼくたちは同じ顔を持っていて、指の形も同じだった。違っていたのは体重だけだった。病弱なトオルは、ずつとぼくよりも二キロか三キロぐらい軽かったんだ。

でもあのとき、ぼくにはトオルが言った「風」を見るができなかった。それがどんなにきれいなのか、想像することもできなかった。だいたい、

風を見る、というあいつの言葉の意味が、ぼくにはわからなかった。

なんだか、トオルに取り残されてしまったような感じがした。

風がきれいだ、と言った十日後に、トオルは死んだ。二人で生まれてきたのに、トオルだけが先に死んでしまった。

結局のところ、トオルの言葉をぼくがようやく理解できるようになったのは、それから十年も経ってからだ。

やっぱり双子なんだなと思ったよ。だって、ぼくにそれが起こったのも、トオルと同じように病院のベッドの上だったんだから。

ぼくにとっての始まりは、一昨年おととしの三月にやつてきた。

新聞も日記もどんな記録も必要ない。あの日のことは、はっきりと覚えている。春分の日を前にした三月十九日——最初で、たぶん最後のぼくたちのCDができた日。

発売なんてされてない。いわゆるインディーズってヤツだから。バイトで稼いだカネを持ち寄って、自主製作のCDを作ったんだ。「チャーリー・ブラウン」というのがぼくたちのバンドの名前で、アルバムのタイトルも、そのままバンド名をつけた。十二曲入ってるうちの七曲はぼくが作曲したものだ。歌詞を書いたのは、ボーカルのマミ。友田ともだ雅美まさみというのが彼女の名前だけど、雅美なんて呼ぶヤツは誰もいない。ぼくの担当はギターとバックコーラス。

歌うのはあまり得意じゃないんだけど。

とにかく、そのできたばかりのほやほやのCDを持って、ぼくは祖師谷そしげへ行った。姉貴は、結婚してからずっとダンナと祖師谷に住んでいた。そんなに大きな家じゃないが、一階建てで、家の裏側には小さいながら庭なんかもあって。

バンドをやつてることについては、オヤジもオフクロもあまりいい顔はしてくれなかった。いつまでも遊んでいないでちゃんとした職に就かなきゃダメだと、家へ帰る度に言われる。フリーターだってバンドだってちゃんとした職業だと主張したくても、しょっちゅう姉貴に借金したりしてるんじゃ、説得力はないよな、まあ。

だから、結局、身内で理解者は姉貴だけってことだったんだ。アルバムに入れた何曲かは前にテープで聴かせていたこともあって、CDは誰よりもまず姉貴に、とずっと思ってた。

ただ、玄関のチャイムを鳴らしても、返事がなかった。脇のガレージを見ると姉貴のシビックはちゃんと停まっている。

へんだな、と思いながらぼくはなんとなくドアの

ノブに手をかけた。

「……………」

鍵が開いていた。

「千佳ちゃん？」

家の中に声をかけながら、玄関に首を突っ込む。

そのとたん、うぐぐ、といううめき声のような奇妙な音が、奥から聞こえた。

なんだかイヤな予感がして、ぼくはドアに手をかけたまま玄関の奥を覗き込んだ。

「千佳ちゃん……………」

もう一度呼んでみる。

返事はなかった。ただ、ガタガタと家具を揺すっているような音が、どこからか小さく聞こえる。

同時に、誰かが何かを喉に詰まらせたときに発するような、うめき声に似た音が――。

「上がるよ」

言つて玄関へ入り、後ろ手にドアを閉める。靴を脱ごうとして狭い玄関ホールの床に目を落としたとき、ぼくは奇妙なものを見た。

「……………」

磨き上げたフローリングの表面に、白っぽい汚れ

が左手の階段のほうへ点々と続いていた。靴跡のように見える。

きれいい好きの姉貴が床を汚れたままにしているというのは妙だった。この家の床は、滑って危ないんじゃないかと思えるほどに、いつだって磨き上げられている。一度それを指摘すると「じゃあ、滑るかどうかやってごらんさいよ」と姉貴は腰に手を当てながら言った。スリッパを脱ぎ、靴下の足で試してみたが、床はその見た目ほどは滑らなかった。

「ツヤは出るけど滑らないポリッシュがあるのよ」得意げに言つて、洗面所から緑色のプラスチック容器を持ってきて見せた。カタログ通販に注文して買ったものだと言っていた。

そんな姉貴の自慢の床に、かすれたような靴の跡がところどころ残っている。

イヤな気分だった。妙に胸騒ぎがする。

「千佳ちゃん……………いるの？」

いるなら、もっと前に返事が返ってくるはずだ。

午後の二時を過ぎたばかりだったから、ダンナが帰っているわけもない。姉貴夫婦には、まだ子供がない。

小さく息を吸い込んで、ぼくは靴を脱ぎ、脇に置かれていたスリッパに足を入れた。もう一度、床に浮き出した白い汚れに目を落とした。

やはり靴の跡だ。種類がどんなものかわからないが、小さな五角形を放射状に並べたような靴底の模様がフローリングの表面に貼りついている。見る角度を変えると、玄関からの光の反射にかき消されてしまう程度のかすかな汚れ。

カタン、と乾いた音が頭上から聞こえた。

「……………」

思わず天井を見上げる。吹き抜けの壁が窓からの光をはね返して真っ白く輝いていた。靴跡は、その光を受けて階段へ続いている。

焦りのようなものが、ぼくを階段へ向かわせた。狭い踊り場までの五段を駆け上がり、折り返して二階の廊下までが七段。

「千佳ちゃん？」

声を上げながら、廊下を奥へ進む。右手すぐのドアは将来の子供部屋。その奥に姉貴夫婦の寝室がある。

ぐぐぐ、といううめき声が、その寝室から聞こえ

ていた。

「どうしたんだ？ 入るよ」

閉じられているドアをノックする。その向こうのうめき声が、一瞬大きくなったように思えた。

ノブに手をかけ、一気に押し開けた。

「あ……」

思わず、ぼくは息を呑んだ。

壁に寄せたキングサイズのベッドの中央に、全裸の姉貴が大の字に縛りつけられていた――。

両手両足を黒いベルトのようなものでベッドの四隅に固定され、顔の下半分にはガムテープが何重にも巻きつけられて口をふさがれている。

そのふさがれた口でなともうめき続けながら、姉貴は恐ろしいほど見開いた眼でぼくを見つめながら必死に首を振っていた。もがき続けている姉貴の身体には、正視できないほど紫色のまだら模様が胸や脇腹や太股に浮き出ていた。誰かにひどく殴りつけられ、それが紫の痣の模様を作っていたのだろう。縛られている両手首から先もやはり気味が悪いほど変色している。

「どうしたの……！」

ぼくは声を上げながら寝室へ飛び込み、ベッドに駆け寄った。

姉貴の頭がなおさら激しく振られた。その手首にくい込んだベルトに手を伸ばしたとき、ガムテープでふさがれた姉貴の喉が「うぐぐぐ！」と悲鳴のような音を立てた。見開いた眼が、ぼくの頭上を通り越して、その後ろに向けられていた。

「――」

はっとして、振り返ったときにはすでに遅かった。いきなり、ぼくの顔面でなにかが炸裂した。その瞬間、ズン、と視界が狭まり、耳元に激しい息づかいの音が飛び込んできた。カーペットの上に倒れ込むとき、ぼくは自分の左手がなにか柔らかいものをつかんだような気がした。

同時に、後頭部に次の衝撃がきた。

何が起こったのかまるでわからないままに、ぼくの意識はそこで途切れてしまった。

――これがすべての始まりだったのかどうか、もちろんぼくにもわからない。

トオルには十数年前に起こっていたことなのだから、

ら、すでにほとんどの準備はぼくのほうにもできていたのだろう。

学者が使った言葉をそのまま流用すれば、もし〈染色体異常〉のようなものがあったのだとすると、トオルとぼくには生まれたときから、すでにその〈異常〉が存在していたと考えるべきなのかもしれない。

だけれども、トオルにしてみても、それが表に現われたのは最後の入院の時からだったのだ。それが十何年も遅れてぼくのところへやってきた。

身体の中で眠っていたものが外へ出てくるためには、なにかのきっかけが必要だったのかもしれない。そのぼくにとってのきっかけが、一昨年の三月十九日だったわけだ。

なぜなら、それを境にして、ぼくの世界が変わりはじめたからだ。

病院のベッドの上で意識を取り戻したとき、ぼくはそれまで過ごしてきた二十三年間とは、まったく違う世界に放り込まれていたんだ。

ただ、最初の最初から、自分と自分を取り巻く世界の変化に気づいていたわけではなかった。なにかがおかしい、と思うようになるまでには、ある程度の時間が必要だったのだ。

意識を取り戻したばかりが最初にやったのは、激しく咳き込むことだった。

これには、病室にいたみんながびっくりしたらしい。それはそうだ。ずっと意識不明だった人間が、いきなり喘息を起こしたようにベッドの上で咳き込みながら痙攣をしながら始めたのだから。

とにかく、ぼくとしては喉に異物が飛び込んできたようなショックを感じていたんだ。わけのわからないものを間違つて呑み込んでしまったんだと思った。必死になって、その異物を吐き出そうとした。事実、聞いたところによると、ぼくはベッドの上

でいきさか吐いたらしい。もつとも、そのときのぼくの胃袋の中には、吐き出せるようなものはないも入っていなかったから、結局、枕カバーを汚したのは胃液と唾液だけだったのだけれど。

苦しくて仕方なかった。

呼吸ができない。息を吸い込もうとすると、また異物がぼくの喉に飛び込んでくる。頭が割れるように痛み、ドクドクドクドクと音を立てていた。

胸から上は灼けるように熱を持っているのに、その下は氷漬けにされているのではないかと思えるほど冷たかった。特に熱いのは胸の内側だった。肺に吸い込んだ空気が燃え上がっているように思える。その空気をすべて追い出してしまいたかった。

ずいぶん長い間、ぼくは咳をし続けていたらしい。医者がぼくの腕に注射を打ち、そして、ぼくはまた意識が遠くなるような気持ちに襲われて、眠りについた。

その眠りが覚めたとき、ぼくははじめてあの奇妙な体験をした。

夢を見ている、とぼくは思っていた。

海の中を泳いでいるような夢だ。色も形も定かで

ない得体の知れないものが、ぼくの周囲を通り過ぎていく。おびただしい数のクラゲが海の中を埋め尽くしているように思えた。見たこともないような奇妙なクラゲの群れだ。そのひとつひとつは、大きさも色も形もすべて違う。そのクラゲたちは、次々にぼくの顔に貼りついては剥がれて泳ぎ去っていく。

時折、ぼくは大きなクラゲのかたまりに身体全体を包み込まれてしまう。そのクラゲは、なんとぼくの鼻や口から身体の中にまで入ってこようとするので。ただ不思議なことに、クラゲに鼻や口をふさがれても、ちっとも苦しくはならなかった。

「ミノル——」

大きなクラゲが、ぼくに話しかけた。身体を押し包むそのクラゲの感触は、なぜかとてもぼくの気持ちと和らげた。ときどき、そのクラゲの向こうから、少し固めの小さなクラゲが現われる。小さなクラゲは、群れを作って大きなクラゲを押しつけるながら、ぼくの顔をピタピタと叩いた。

「ミノル、わかる？」

また大きなクラゲが言った。

あれ、へんだな……と、ぼくは考えた。そのクラ

ゲの声がオフクロのものだったからだ。

それと同時に、ぼくの額に暖かい掌があてられた。

「……………」

一瞬、ぼくは混乱した。

額に置かれた掌の感触が、ゾクツとするような現実感を持っていたからだ。夢の中に、いきなり現実の手が現われたような感覚だった。

「聞こえる？ ミノル、聞こえてるの？」

大きなクラゲが、オフクロの声でぼくを呼び続けている。そして——。

そのクラゲの姿が、いつのまにかぼくを覗き込んでいるオフクロの姿に変わっていた。

「お……」

お母さん、と言おうとして、ぼくはまた少し咳き込んだ。声がうまく出てこなかった。

咳き込んでいるぼくの胸のあたりを、オフクロの手がやさしくさすった。

その時はじめて、ぼくは自分がベッドで寝ていることに気がついた。ぼくの胸には白いカバーで覆われた薄い毛布がかけられている。オフクロの顔の向こうには、見覚えのない壁と天井があった。